

佳
作

「神の壊れた秤

）
17

a
n
d
p
a
i
n
）
」

岡
田
幸
男

あらすじ

クリスマス前の2日前、児童養護施設・江田学園（通称エデン）に連れて来られた6歳の菱見元基は、同じ年の進藤憲太、川村紗雪と知り合う。

3人は星川高校に進学し、菱見と進藤は野球部に入学し紗雪はマネージャーとなり、3年生の夏、高校野球界屈指の左腕となった菱見の活躍で甲子園大会の出場を決める。

ところが甲子園大会開幕の一週間前、進藤が紗雪を暴行する事件を起こし、星川高校は甲子園出場を辞退する事となる。

進藤は少年鑑別所に、紗雪は別の施設へと移りバラバラになる3人。

目的を失い、苛立つ菱見は紗雪を責める。「なぜ黙ってなかった？ お前のせいで俺達の夢が吹き飛んだ」

その言葉に進藤への告訴を取り下げる紗雪。秋のある日、星川高校にプロ野球のスカウト4人がやって来る。目的は進藤の暴行事件の為に一年間の対外試合自粛で実戦から遠のいている菱見の現状調査。

ユニフォームに着替えに部屋に入った菱見は偶然居合わせた進藤と鉢合わせる。

笑顔で抱き合う二人。暴行事件は菱見、進藤、紗雪の狂言だったのだ。理由は江田学園の閉鎖と菱見の深刻な肩の故障。

「神様の秤は壊れているから、自分達の運命は自分で取り分ける」

菱見の故障を隠し通しドラフト指名を受ける。そ

れは3人のこれまでの不運な人生との決別と、江田学園再生を意味する事だった。

居並ぶスカウトの前、壊れた肩の菱見の戦いが始まる。ここで菱見が投げられるかどうかで3人が挑んだ賭けの勝敗が決まる……

そしてドラフト会議で指名される菱見。しかしそのプロ野球選手生命は、数ヶ月後のキャンプ初日で終わる。

夏、新生江田学園で紗雪と再会する菱見。はたして彼ら3人が痛みの中で手にしたものとは何だったのか……

登場人物

菱見元基	(6)	高校生
進藤憲太	(6)	高校生
川村紗雪	(6)	高校生
江田慎二	(27)	園長
太田剛志	(36)	野球部監督
警官A	(44)	
警官B	(36)	
女子アナ	(26)	
客A	(29)	
客B	(29)	
片山	(42)	スカウト
森尚之	(17)	高校生
児童相談所職員	(25)	
医師	(35)	
実況アナウンサー	(31)	

○ 江田学園・正門前(夜)

粉雪の舞う薄暗い歩道。

アーチ型の飾りのついた門を見上げる菱見元基(6)。

アーチには『江田学園』のレリーフ。

菱見(ナレーション)「神様の秤は壊れている。だから俺達は自分の手で取り分けることにした……」

○ 同・中庭(夜)

菱見、児童相談所職員(25)(以下職員)に促されて門をくぐる。

クリスマスの電飾が輝く中庭、光の中から笑顔の江田慎二(27)が現れる。

江田「菱見元基君ですね」

職員「すみません、遅くなってしまってます」

江田「いえ、ご苦労様です」

職員に一礼し菱見の前にしゃがむ江田。

江田「よく来たね。今日からここが君の家だ」

菱見「……(江田の肩越し、一点を見ている)」

電飾が輝く樅の木の前に、進藤憲太(6)と川村紗雪(6)が立っている。

江田「憲太と紗雪、君と同い年の同級生だよ」

面倒臭そうに片手を上げる進藤、はにかんだ笑顔でペコリと頭を下げる紗雪。

菱見「(こわばった表情)……」

江田が菱見に向き直ったとたん、ズボンを下げて剥き出しの尻をペンペン叩いてみせる進藤。

明るい光がこぼれる窓、数人の子供達が声を

上げて笑う。
つられてクスリと笑う菱見。

江田「?(振り返る)」

すでにズボンを上げ、すまし顔で立っている

進藤。

職員「(笑いかみ殺しながら)では私はこれです……明日の午前中に改めてお伺いしますので、園長先生によるしくお伝え下さい」

江田「はい、ご苦労様でした」

進藤、菱見に玄関を顎で指し歩き出す。

無言で進藤の後に続く菱見。

紗雪、ポケットから赤い縞模様の包みのキャンディを一粒取り出し、そっと菱見に差し出す。

ためらいがちにそれを受け取り、すぐにポケットにしまう菱見。

○ 市民球場・グラウンド

夏の青空に響く歓声と鳴り物。

マウンドの菱見(17)の元に集まる内野陣。

× × × × × × × ×

バックネット裏の仮設放送席。

興奮気味の実況アナウンサー(31)。

実況アナ「2001年、夏の甲子園大会出場をかけた決勝戦、土壇場9回の裏に波乱が待ち受けていました!」

× × × × × × × ×

スコアボード、星川高校が1対0で鶴島実業高校をリードしている。

進藤「どうするモトキ? 軽くヤベーな」

キャッチャーマスクを取り、2塁、3塁の走者を見やる進藤(17)。

実況アナ声「星川高校、サード森君の連続エラーで、ノーアウト2、3塁、一打出れば逆転サヨナラ負けの大ピンチです!」

うなだれる森尚之(17)。

森「(涙目)菱見ゴメン!」

進藤「泣くなバカ(ミットで森の頭をこづく)」

菱見「(平然と)次の三人、連続三振に取るから、お前らは立ってればいい」

進藤「だつてさ(笑う)、やっぱウチの大エース様は頼もしいや」

菱見「ケンタ、次バスポールしたら殺ス!」

進藤「まかせとけて!!(ミットをバスポス叩く)」

菱見「(静かだけれど力強い口調)絶対行くからな! 甲子園」

一同「(叫ぶ)おーっ!」

それぞれのポジションに散る選手達。

念入りにスパイクでマウンドを均しながら、

ベンチを一瞥する菱見。

メガホンを手を顔を真っ赤にして指示を出す

太田剛志(36)、その隣りで、胸の前で手を合わせ祈る様に菱見を見つめている紗雪(17)。

ロジンバッグを手を空を見上げる菱見。

菱見「(呟く)もつてくれよ……」

ロジンバッグを捨て、ユニフォームの胸のあたりを握りしめ目を閉じる。

一際、応援の声が大きくなる。

ホームベースに向き直る菱見。

進藤が大きく両手を広げる。

審判の右手が上がる。
腰を落とす内野陣。

叫ぶ太田、祈る紗雪。

大きく振りかぶり足を上げる菱見。

○ 星川高校・グラウンド

グラウンドの隅、野球部部屋の脇、二台並んだ洗濯機が唸りを上げています。

紗雪が、水を張ったバケツに足を突っ込み、

文庫本を読んでいる。

ブザーが鳴り、本を閉じて裸足のまま大量の洗濯物を干し始める。

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・野球部部屋・室内

整理整頓された部屋。

奥のロッカーの前、こちらに背を向けて菱見が座っている。

紗雪「何だ、菱見君ここにいたの？ もうすぐテレビ局が来るって監督が探してたよ」

その声に背番号1がギクリと動く。

紗雪「すぐにバックネット前に来いってさ」

菱見「（背中を向けたまま）ああ、わかった」

ヤカンを机の上に置いて出て行く紗雪。

歯を食いしばり蒼ざめた顔の菱見、大粒の汗が噴き出している。

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

星川高校のグラウンドに来ています」

列の先頭に菱見、最後尾の紗雪の隣りで退屈

そうにガムを噛んでいる進藤。

進藤「（ボンリと）テレビって、地元ローカルかよ

……」

○ 同・バックネット裏

数十人程の見物客。

最前列に客A(29)と客B(29)。

客A「県予選初戦敗退常連校の星川が甲子園だなんて胸熱だよなあ」

客B「つつても、菱見におんぶに抱っここのチームだろ？ 菱見一人が超高校級で後はリトルリーグ

級！」

客A「そうだけど、菱見の実力は本物だぜ！ 県予

選の決勝見たかよ？」

客B「ああ、ありゃあ凄かったな！ スクイズのパ

ッターがボールかすりもしなかったもんな、終

わってみりゃ三者連続三球三振！ マジ鳥肌立

ったぜ」

突然、近くにいた数人の女子高生が黄色い歓

声を上げ、驚く客Aと客B。

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

女子高生達(声)「菱見くん！」

バックネット裏で手を振る女子高生達。

声の方向へ軽く一礼する菱見。

女子アナ「菱見君、スゴイ人気ですねー！」

菱見「（そっけなく）チームを応援してもらえるの

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・グラウンド・足洗場

足を洗っている紗雪、顔を上げると菱見が立

っている。

菱見「行こうぜ」

紗雪「え？」

菱見「テレビ局が来るんだろ？」

紗雪「でもアタシは選手じゃ——」

菱見「行こうぜ」

紗雪「（笑顔）うん」

慌ててローファーをつっかけて、菱見を追い

かける紗雪。

校舎に下がった「祝！ 甲子園初出場」の垂

れ幕が風に揺れている。

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・グラウンド

カメラの前に菱見がやって来る。

女子高生達(声)「菱見くん！」

バックネット裏で手を振る女子高生達。

声の方向へ軽く一礼する菱見。

女子アナ「菱見君、スゴイ人気ですねー！」

菱見「（そっけなく）チームを応援してもらえるの

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・グラウンド

カメラの前に菱見がやって来る。

女子高生達(声)「菱見くん！」

バックネット裏で手を振る女子高生達。

声の方向へ軽く一礼する菱見。

女子アナ「菱見君、スゴイ人気ですねー！」

菱見「（そっけなく）チームを応援してもらえるの

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・グラウンド

カメラの前に菱見がやって来る。

女子高生達(声)「菱見くん！」

バックネット裏で手を振る女子高生達。

声の方向へ軽く一礼する菱見。

女子アナ「菱見君、スゴイ人気ですねー！」

菱見「（そっけなく）チームを応援してもらえるの

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・グラウンド

カメラの前に菱見がやって来る。

女子高生達(声)「菱見くん！」

バックネット裏で手を振る女子高生達。

声の方向へ軽く一礼する菱見。

女子アナ「菱見君、スゴイ人気ですねー！」

菱見「（そっけなく）チームを応援してもらえるの

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

○ 同・グラウンド

カメラの前に菱見がやって来る。

女子高生達(声)「菱見くん！」

バックネット裏で手を振る女子高生達。

声の方向へ軽く一礼する菱見。

女子アナ「菱見君、スゴイ人気ですねー！」

菱見「（そっけなく）チームを応援してもらえるの

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

たく、おめくらお仕置きだべー！」
 パクンとマイクをくわえる進藤。

× × ×

女子アナ「(小さく咳く)このクソガキ！」

頭上で×マークをつくるディレクター。

太田が怒鳴りながら駆け寄り、進藤の口から
 マイクを奪い取る。

大笑いのナインとバックネット裏の観客達。

○ 江田学園・外観(夜)

アーチの飾りのついた門、遊具の並ぶ中庭、
 白く塗られた木造の二階建て。

○ 同・玄関内(夜)

ボランティアの大学生が4人、靴をはいて帰
 り仕度をしている。

大学生「(口々に)お先に失礼します」

江田「お疲れ様でした」

深々と頭を下げて見送る江田。

○ 同・娯楽室(夜)

くつろぐ子供達。

小学生の男の子と格闘ゲームをしている進藤。

進藤「(叫ぶ)あーっクソッ！」

コントローラを投げ出す進藤。

小学生「憲太兄ちゃん弱い」

進藤「あ、言ったな！ 憲太兄ちゃんマジギレ」

小学生を肩に抱え上げて振り回す進藤、キャ

ツキヤとはしゃぐ小学生。

○ 同・渡り廊下(夜)

中庭に面した短い廊下に腰掛け、ぼんやりと
 庭を眺めている菱見。

紗雪(声)「もうすぐテレビ始まるよ」

菱見が振り返ると、笑顔の紗雪がいる。

紗雪「何考えてたの？ 甲子園のこと？」

菱見「初めてここに連れて来られた夜のことを思い

出してた……」

紗雪「確かクリスマス前の2日前だったよね？(菱見

の隣りにしゃがむ)」

菱見「赤や青の電球がピカピカ光ってさ……(ク

スリと笑う)」

紗雪「？(菱見の顔を覗き込む)」

菱見「(少し照れくさそうに)あの時、俺にはここ

が本物の楽園に見えたんだ……」

紗雪、菱見の横顔をじっと見つめる。

紗雪「うん、だってここはエデンだもん！」

紗雪、ボンと立ち上がる。

紗雪「この通り、エンジェルだっています」

紗雪、おどけた仕草でカーテシー。

進藤(遠くからの声)「おーい！ 始まったぞ」

紗雪「(声の方を指差し)悪魔もいます！」

吹き出す菱見。

菱見「じゃあ俺は？」

紗雪「菱見君は……林檎かな？」

菱見「林檎？ 林檎って、アダムとイブがエデンを

追い出された原因だろ？」

紗雪「人間を人間たらしめるものだよ」

菱見「(苦笑)……川村の言うことは時々難し過ぎ

て、俺にはよく分かんないよ」

紗雪「菱見君はエデンの希望なんだ」

菱見「(笑って首を振る)そんなリッパなもんじゃ
 ないよ」

紗雪「(強い口調で)ううん、菱見君はそうなの！

そうじゃなきゃダメなの！」

菱見「……」

少し驚いた表情で紗雪を見つめる菱見。

○ 同・園長室(夜)

本に囲まれた部屋、壁には先代園長(江田の
 父親)と創立当時の学園の写真。

江田(38)、菱見、進藤、紗雪がソファーに座り

テレビを見ている。

画面にはインタビュに答える紗雪。

画面の女子アナ「尊敬する人は？」

画面の紗雪「江田園長先生」

江田「おいおい(照れて頭を掻く)」

進藤「(呆れ顔)サユキ、お前よくこんなあざとい

コト平気で言えるよな？」

紗雪「(悪びれず)だって本当のことだもん」

画面の紗雪「将来は学園のお手伝いができればと思

っています」

江田「(表情が曇る)……」

ウゲエと吐きマネをする進藤、ぼんやりと画

面を見つめている菱見。

画面の女子アナ「では紗雪ちゃんの夢は江田学園の

先生になることですね？」

画面の紗雪「いえ、夢は小説家です！」

進藤「はあ？ 何じゃソリヤ？ お前言ってること

バラッバラじゃねえかよ！」

紗雪「(涼しい顔で)女はいろいろ複雑なの」
画面の女子アナ「以上、星川高校ナインへのインタビュでした」

進藤「以上っておい！俺のインタビュはどうしたんだよ？俺の全部カットか？」

思わず立ち上がる進藤。

進藤「女子マネのインタビュは流して、守備の要キヤッチャーで3番打者の俺様のインタビュはカットって、ありえなくね？」

紗雪「仕方ないよ！あんなふざけた受け答えばかりして、放送できっこないじゃない」

進藤「ふざけてねえよ！俺は全部本当のこと言っただけだよ！なあモトキ」

菱見を振り返る進藤。

画面を見つめたまま無言の菱見。

進藤「(怒鳴る)モトキ！」

ハッと気付き振り向く菱見。

菱見「あ、ああ」

進藤「ああじゃねえだろ、何なんだよクソ面白くもねえ！」

ソファアを蹴飛ばし、席を立つ進藤。

江田「憲太、悪いけどもう少しいいかな？」

進藤「？(振り返る)」

江田「君達に話しておきたいことがある……」

真剣な面持ちで三人に向き直る江田。

○ 星川高校・グラウンド

『祝！夏の甲子園初出場』の垂れ幕。

ヤカンを下げた紗雪とランニング中のナインがすれ違う。

○ 救急病院・車寄せ(夜)

ワンボックスの軽自動車が止まり、江田と菱見が飛び出して来る。

○ 同・診察室内(夜)

制服の警官A(44)と医師(35)が立ち話をしているところへ、江田と菱見が駆け込んで来る。

江田「(息を切らして)学園の江田です！」

警官A「ああ園長先生ですか？お待ちしております」

した」

江田「川村は？」

警官A「治療を終えて、今、事情聴取を行っている

ところです」

医師「怪我は軽い擦り傷程なので心配ありません、

ただ精神的なダメージが……」

江田「あの、いったい何が？」

警官A「ええ……(顔を曇らせる)」

○ 同・診察室内(夜)

頭から毛布を被った紗雪(手に包帯、膝には大きな絆創膏)が、診察台に腰掛け、婦人警官の質問に答えている。

警官A声「本日の二十一時十五分頃、巡回を終えて、

ちょうど交番に戻った時……」

○ 回想・派出所・室内(夜)

急須にお湯を注いでいる警官A。

人の気配、視界の端に片方は靴、片方は靴下の足元が映る。

警官A「!(驚いて顔を上げる)」

虚ろな目をした紗雪が立っている。

ブラウスは破れ、スカートは泥だらけ。

警官A「(ゆっくと立ち上がる)大丈夫だよ……

もう大丈夫だからね」

ストンとその場に崩れる紗雪。

内ももを伝う細い血の筋。

○ 救急病院・診察室内(夜)

江田「(激しく頭を振る)何てこった！」

うつむいたまま無言の菱見。

江田「いったい！いったい誰が？」

警官Aに詰め寄る江田。

警官A「川村さんの供述によると(手帳を開く)、

部活の事で相談があると森尚之にメールで呼び

出されて、二十時に星川高校野球部の部室まで

出向いて行ったそうです」

○ 紗雪の供述・星川高校野球部部室・室内(夜)

用具棚を片付けている紗雪。

突然、明かりが消える。

紗雪「!(振り返る)」

窓から差し込む外灯の光に、黒いシルエット

が浮かびあがる。

紗雪「森君？」

シルエットが動き、紗雪の腕を掴む。

紗雪、悲鳴を上げその手を振り解き、棚の用

具を手当たり次第投げつける。

紗雪「森君じゃない！誰？」

ドアに向かって走る紗雪。

一瞬早くシルエットが紗雪のブラウスを掴む、

弾け飛ぶボタン。

もみ合う二つの影。

偶然、紗雪の手が照明スイッチに触れ、明かりが部屋を照らす。

紗雪「！」

薄笑いを浮かべた進藤が立っている。

○ 救急病院・診察室前(夜)

頭を抱えシートに崩れる江田。

背中を向けたまま無言の菱見。

○ 星川高校・グラウンド(朝)

『祝！ 甲子園初出場』の垂れ幕。

○ 同・校長室・室内(朝)

ソファーに江田と太田と校長(51)。

校長「(目を閉じたまま) 辞退以外ないだろう……」

太田「無念です！(唇を噛む)」

江田「申しわけございません(深々、頭を垂れる)」

ノックの音、事務員が飛び込んで来る。

事務員「校長！ 今、警察から連絡が入って、進藤

が見つかってそうです！」

校長「！」

思わず立ち上がる江田と太田。

事務員「駅のコルコースで他校生と乱闘騒ぎを起こして補導されたらしいです」

太田「あのバカ！(拳で自分の太股を叩く)」

○ 警察署・取調べ室

机をはさんで進藤と警官B(36)が向かい合って

座っている。

進藤は私服、ふてくされた表情で足を高く組んで横を向いている。

進藤「やってらんねえし！ どのいつもこいつも菱見！ 菱見つてよ！ 俺はモトキのオマケじゃ

ねえっつーの！」

警官B「だから腹いせに、女子マネージャーをレイ

プしたのか？」

進藤「俺なんて、インタビューもカットだぜ〜あり

えなくね？ 傷ついちゃうよボク」

警官B「星川高校は甲子園を辞退したぞ、お前、悪いとは思わないのか？」

進藤「知るかよ！ 別に俺は好きで野球やってたワケじゃねえし」

警官B「じゃあ何のためにやってたんだ？」

進藤「知りたい？(警官Bに向き直る)」

警官B「ああ、教えてくれるか？」

進藤「入学してすぐに三年のバカ共に呼び出されて

さ、頭きたからモトキと二人でバッキバキにボコってやったんだよ。そしたらバカー号が泡ふいて、こんななつちゃってさあ(白目をむいて

痙攣のマネをする)」

警官B「で、どうしたんだ？」

進藤「救急車呼んでさ、俺とモトキは校長室に呼ばれて、ソッコー退学宣告だよ」

警官B「ほう」

進藤「俺ら、降りかかる火の粉を払っただけじゃん

よ〜全くこの惑星は不条理に満ち溢れてるよな」

警官B「(苦笑) だが退学にならなかつた」

進藤「江田のオッサンがスッ飛んで来て、もう一度

だけこいつらにチャンスをくれって、校長に土下座しやがったんだよ」

警官B「江田学園の園長先生か？」

進藤「ああ、そんな時の交換条件が、3年間部活に専念するってことだったわけさ」

警官B「なるほど、それで野球部に」

進藤「別に野球じゃなくてもよかったんだけどさ……何となくな」

警官B「そこから菱見は才能を開花させて、今や高校野球界屈指の左腕と呼ばれるまでになったんだから大したもんだな」

進藤「何だよ、アンタも菱見菱見組かよ」

警官B「当たり前だ、菱見とお前じゃあ比べることすらおこがましいってもんだ」

進藤「確かに今はそうかもな、でもモトキから野球を取り上げてやったから、アイツまたすぐに俺の所まで下りて来るぜ」

声上げて笑う進藤。

○ 星川高校・会議室・室内

集まった報道陣。マイクの立ち並ぶ机。

頭を下げる校長、江田、太田。

校長「今回の不祥事を重く受け止め、甲子園は辞退、野球部の向こう一年間の対外試合は自粛とさせていただきます」

一斉にフラッシュがたかれ、一層深々と頭を下げる三人。

○ 同・グラウンド・野球部部室・前

泣きじゃくるナイン。

菱見、「祝！ 甲子園初出場」の垂れ幕が取り払われるのを無言で見つめている。

○ 江田学園・正門前（夕）

学園の子供達が下校して来るのを待ち構えて、マイクをむけるTVクルー。

○ 同・娯楽室（夜）

突然、テレビを見ていた子供が叫ぶ。

子供「憲太兄ちゃんだ！」

画面にはモザイクをかけられた進藤。

画面の進藤「ジェイソンは美しい！ 奴は自由だ！ 奴は正しい！ 奴こそ真実だ！ 俺もジェイソンみたく、おめくお仕置きだべく！」

近くにいた子供達がテレビの前に集まる。

画面（インタビュ어의リピート）「この映像は、星川高校の暴行事件の前日に容疑者A少年に行われたインタビュ어의模様です」

通りかかったポランティアの女子大生が慌ててチャンネルを変える。

救急病院・病室（夜）

○ 救急病院・病室（夜）

ベッドで上半身を起こした紗雪と、脇の椅子に座った江田が話している。

○ 江田学園・食堂（深夜）

常夜灯だけが灯る薄暗い部屋。

水を飲んでいる菱見、ふとオレンジ色のカップが目に入る。

ウサギの絵の下にマジックで『さゆき』と書

かれてある。

江田（声）「紗雪はもう戻って来ないよ」

菱見「！（振り返る）」

疲れきった顔の江田が立っている。

江田「紗雪の希望で、退院したら卒業までの半年、別の施設で過ごすことになった」

水を飲む菱見。

菱見「……バカは？」

江田「憲太か？ 観護措置のために鑑別所に送られた。もちろん学校は退学だ」

菱見「ここへは、いつ戻って来るんですか？」

江田「それはまだ何とも……あんな奴でも、まだ心配してやってくれるのか？（微笑）」

菱見「いえ、戻って来たら殺そうかなと」

江田「元基……」

食堂を出て行く菱見の背中を沈痛な面持ちで見つめる江田。

街角・電気店の前（朝）

○ 街角・電気店の前（朝）

店先のTV画面を見ている菱見。

画面「第83回全国高等学校野球選手権大会、選手入場です——」

背中を丸め歩き出す菱見。

○ 星川高校・グラウンド

グラウンドの隅に転がった野球ボールが、土砂降りの雨に打たれている。

○ ファミレス・厨房

皿洗いをする菱見。

○ 街角・電気店の前

菱見が歩いてくる。店先のTV画面には甲子園大会の中継が流れている。

画面「2011年、長かった夏の甲子園大会もいよいよ大詰めを迎えました。優勝を争うのは西東京代表の——」

TV画面を見ようともしせずに通り過ぎて行く菱見。

○ 星川高校・校門（朝）

登校風景。

○ 同・三年生の教室前廊下

行き交う生徒達の笑い声が響く。

女子生徒（声）「川村さん！」

その声に周りの生徒が一斉に振り返る。生徒達の視線の先、廊下の端、こちらへ向かって歩いて来る紗雪の姿。

静まり返る廊下。

廊下の中央付近、菱見が窓枠に肘を掛けて外

を見ている。菱見の前に差し掛かる紗雪。

菱見「（外を見たままで）何で黙ってなかったんだよ？」

足を止める紗雪。

菱見「お前がベラベラ喋ったせいで、俺達の夢が全部吹き飛んじまった」

前を向いたまま唇を噛む紗雪。菱見「（紗雪に向き直り）何で黙ってなかったんだよ？」

紗雪「(力なく)……ごめんさい」

菱見とは目を合わさず、逃げる様に足早に立ち去る紗雪。

菱見「(紗雪の背中に)お前のせいだ！」

○ 同・自習室

窓際の席で教科書を広げる紗雪。

菱見が校庭を横切って行く。

遠ざかる後ろ姿を無言で見つめる紗雪。

○ 江田学園・渡り廊下(夜)

廊下に座り、ぼんやり庭を眺めている菱見に、

江田が近寄る。

江田「ちよつといいか？」

菱見「……はい」

菱見の隣りに座る江田。

江田「元基は小さい時分から、よくここに座って中庭を眺めてたっけな」

菱見「……」

江田「あれからもう十一年だ、親父からこの学園を引き継いで八年……僕はいつたい何をやってきたんだろうな……」

菱見「……」

江田「今日、学校で何かあったのか？」

菱見「？」

江田「紗雪が告訴を取り下げた」

菱見「……いえ、別に……」

江田「そうか、だったらいいんだ」

江田、菱見の肩を軽く叩いて立ち去る。

○ 星川高校・教室・3年7組

冬服の制服の生徒達。

教師「歴史のうねりを俯瞰で見ると——」

ノックの音。太田が入ってくる。

太田「授業中すみません(教師に頭を下げ)、菱見！ちよつと校長室まで来てくれ」

菱見「……はい(立ち上がる)」

× × ×

教師「あたかも歴史は、それ自身が意思を持って決断を下したかのように——」

突然窓辺の生徒が立ち上がる。

生徒「(叫ぶ)進藤だ！」

次々と窓辺に押し寄せる生徒達。

○ 同・グラウンド

校舎の脇の小道を歩く私服の進藤。

生徒声「おい、進藤——」

声の方を見上げる進藤。

教室の窓、鈴なりの生徒の顔。

数人が笑顔で手を振る。

笑って片手を上げた進藤の頭に、バコンと何が当たり地面に落ちる。

薄汚れたボロボロのスニーカー。

進藤「!(険しい顔で見上げる)」

口々に罵りながら、進藤めがけて物を投げつける生徒達。

進藤「(一瞬悲しげな表情を浮かべるが、すぐに笑顔になり)校門のトコで待ってっからよ!放課後個人面談するべ」

ピタリと投げるのをやめる生徒達。

○ 同・校長室・室内

緊張気味の校長と太田。

各球団のスカウト4人がソファで談笑している。

菱見「失礼します」

菱見、入室。

校長「おお!菱見君(笑顔で手招き)」

スカウトの中の一人、国立アックスの片山(42)が声を掛ける。

片山「甲子園は残念だったね」

菱見「はい……」

片山「練習試合も自粛と言うことなんで、久しぶりに菱見君の剛速球を見たくなってね。今日はこうして雁首を並べて押しかけて来たってワケだ(笑う)」

太田「これから投げられるか?菱見」

菱見「ええ、もちろん!」

○ 同・野球部部室・前

野球部の文字が赤いスプレーで消され、横にレイプ部と落書きされている。

菱見「!(ドアを開ける菱見)」

○ 同・同・室内

散らかり放題の部室内、奥のロッカールの前、背中を向けて進藤が座っている。

菱見「(怒鳴る)ケンタ!」

ゆっくり振り返る進藤。

○ カットイン・江田学園・園長室（夜）

振り返る進藤。

テールを挟んで菱見と紗雪に向き合う江田の思いつめた顔。

江田「君達に話しておきたいことがある……」

進藤「あ！ 婚約発表？ いいかげん嫁さんもらわなきゃ立ち枯れちゃうよ（笑う）」

江田「学園を閉鎖することになった」

菱見

進藤「！」

進藤「閉鎖って、なくなんのココ？」

江田「借地契約が今年で満了となるんだ」

進藤「なんだ、だったらまた契約すればいいだけの話じゃん！」

江田「もちろんそのつもりだったが、地主さんの会社が倒産してね、どうしてもここを売却せざるを得なくなっちゃったんだ」

進藤「なんだ、だったら買えばいいじゃん！ てなワケにはいかねえか……やっぱ」

江田「すまない僕の力不足だ（頭を下げる）」

紗雪「頭を上げて下さい！ 園長先生」

頭を下げたまま動かない江田。

×

暗い廊下を無言で歩く、菱見、進藤、紗雪。

子供達の笑い声が聞こえる。

紗雪「（呟く）アタシ達、本当に帰る所がなくなっちゃうんだね……」

進藤「……」

菱見「二人に見せたいものがある……」

進藤と紗雪を振り返る菱見。

○ 星川高校・野球部部室・室内

無言で睨み合う菱見と進藤。

進藤「『せかい』の真ん中にいる虫は？」

菱見「トンボ！」

進藤「（吹き出す）バカヤロー！ 『か』だろ」

破顔、ハイファイブ、抱き合う二人。

菱見「どうしてケンタがここにいるんだよ？」

進藤「近くを通りかかったからついでに（野球用具の詰まったバッグを指差す）」

菱見「（真顔になり）いよいよだ」

進藤「じゃあ？」

菱見「今、スカウトが来てる」

進藤「やれそうか？」

菱見「やるさ！」

進藤「だな！（拳を突き出す）」

菱見「ああ！（拳と拳を合わせる）」

進藤「悪いな、こんな時にお前の球、受けてやれなくて」

菱見、笑顔で進藤の右腕をドンと叩く。

進藤「じゃあ俺行くな、こんなとこ誰かに見つかったら元も子もねえからな！」

菱見「ありがとう」

進藤「何が？」

菱見「とにかく、ありがとう」

進藤「バカ（笑う）」

外の様子を確かめて、ピッと菱見を指差して出て行く進藤。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

○ カットイン・江田学園・裏（夜）

自転車置き場の細長い空き地。

ミットを構える進藤めがけて、ボールを投げ込む菱見。

ボールは山なりの曲線を描き、進藤の一メートル手前でバウンドする。

左肩を押さえ苦悶する菱見、駆け寄る進藤と紗雪。

進藤「お前、ここまで悪かったのか？」

菱見「（自嘲気味に）笑えるだろ？」

進藤「地方予選からこっち、ウェイトとランニングばっかで全然投げようとしなからおかしいとは思ってたんだ、でもまさかここまで……」

紗雪「（取り乱す）だって！ だって来週は甲子園だよ！ お医者には見せたの？」

菱見「東京の専門医に診てもらった……野球はもう無理だったさ」

紗雪「そんな……（立ち上がりよろける）」

菱見「だいぶ前からヤバかったんだけど、この間の決勝でとうとう壊れちゃった……」

自転車置き場の支柱につかまり、小さく震えている紗雪。

菱見「ゴメンな、俺、甲子園行けねえや」

進藤「バカヤロー！ 謝んなよ」

泣き出す紗雪。

菱見「(力なく笑う) 神様も性格悪いな……」

進藤「……」

菱見「予告編だけ見せといて、その気になってチケット買ったら本編の上映はもう終わりましたってさ……」

進藤「モトキ! (菱見の肩を抱く)」

紗雪声「ううん! まだ終わってないよ」

菱見「!? (紗雪を見上げる)」

進藤「そのチケット無駄にはしない!」
涙を拭き菱見と進藤を睨む紗雪。

○ 星川高校・グラウンド

ユニフォームに着替えた菱見が、ゆっくりと太田とスカウト達が待つマウンドに向かって歩いて行く。

○ 同・自習室・室内

紗雪以外誰もいない静かな部屋、広げた教科書の横で携帯電話が震える。

紗雪「(携帯を聞く) 進藤君?」

メールを読んで窓辺に走る紗雪。
遠くのマウンドに菱見の姿が見える。

○ カットイン・江田学園・裏(夜)

仁王立ちの紗雪を見上げる菱見と進藤。

紗雪「甲子園は辞退しよう!」

菱見「!」

進藤「サユキお前っ、何言い出すんだよ?」

紗雪「じゃないと菱見君の故障がバレちゃう、とに

かく今は何が何でも故障を隠し通さなきゃ!」

進藤「隠してどうなんだよ?」

紗雪「ドラフト! 今の菱見君の評価なら、必ず秋のドラフトで指名がかかるはず」

菱見「(首を振る) 見ただろ、俺の肩はもう」

紗雪「だから隠し通すんじゃない!」

菱見「!」

進藤「て、お前! それじゃ詐欺じゃねえかよ」

紗雪「(睨む) 悪い?」

進藤「ええ?」

紗雪「人は何も持たずに生まれてくるって言うけど、あれはウソ! 人は様々な物を持って生まれてくる。祝福だったり愛情だったり、家柄や国籍

だったり……」

進藤「何が言いたいんだよ?」

紗雪「アタシ達は、生まれた時から、他の子供達よりも持ち物が少なかった」

進藤「……」

紗雪「それなのに、神様はまだアタシ達の持ち物を取り上げようとしている」

進藤「エデンと野球か?」

紗雪「(声を荒げ) それと夢!」

紗雪、気持ちを落ちつかせる様に、一つ大きく息を吐き、

紗雪「アタシはずっとイジケてた、どうせ何をやっててもアタシには不運が影みたく寄り付いて来るんだしムダだって。でも菱見君を見てるうちに考えが変わったんだ」

菱見「……」

紗雪「だって菱見君、才能って言う誰より大きな持

ち物を抱えてたんだもん! どんどん高く昇ってく菱見君の後ろに、飛行機雲の様に細い道ができてる気がしたんだ」

菱見「……」

紗雪「アタシもその道を辿れば夢に近づける気がした、でも……」

言葉に詰まり、目を伏せる紗雪。

紗雪「でも、菱見君でもダメだった! やっぱり不運が寄り付いて来た……」

唇を噛みうつむく菱見。

進藤「何だよ? モトキをデイスるつもりか?」

紗雪「(叫ぶ) 違う! だからまだ終われないんだよ! 終わっちゃういけないんだよ!」

大粒の涙をポロポロこぼす紗雪。

紗雪「アタシは林檎を齧った! もう神様の言い方にはならない! 運命は自分の手で切り拓く! そのためなら……そのためならアタシは血だって流せる!」

声を上げて泣く紗雪。

進藤「サユキ……」

菱見、肩をおさえて立ち上がる。

菱見「分かったから、もう泣くな……」

菱見、泣きじゃくる紗雪の肩に軽く触れてから、勢い良く進藤に向き直る。

菱見「ケンタ! 誰かに舐められたら?」

進藤「(笑顔で) 100倍舐め返す!」

菱見「神様の顔、舐めまくってやろうぜ!」

菱見と進藤ハイファイブ、紗雪に向かって手の平を差し出す。

紗雪、涙でグチャグチャの顔をほころばせて

る紗雪。

菱見「え……まさか……?」

紗雪「他にし様がないじゃない」

マジックをバッグにしまう紗雪。

菱見「そこまでしなくてもいいだろう?」

思わず声を荒げる菱見。

紗雪「そこまでしないと、神様は騙せない」

菱見「でも……」

紗雪、無理に小さく笑い、

紗雪「古来より神は女の血を好むもの」

菱見「……」

ネットレスを外す菱見。

菱見「これ(差し出す)」

紗雪「でも、これ菱見君のお守り……」

菱見「だから持ってな」

紗雪「……ありがとう」

菱見「絶対! 終わらせねえから」

背中ので聞き店を出て行く紗雪。

○ 星川高校・グラウンド

片膝をついたまま靴紐を結び直すふりをする

菱見。

ボタボタ汗が滴り落ちる。

太田「どうした? コンディション悪いのか?」

マウンドの菱見に近づく太田。

菱見「いえ、絶好調です」

太田「(小声で) 連中、お前が故障してるって疑っ

てるんだ」

小声で話し合っているスカウト達。

菱見「心配ありません大丈夫です」

太田「(笑顔) そうか!」

大きく頷き戻って行く太田。

ボールをこねながら窓を見上げる菱見。

青空に白く細い飛行機雲。

校舎を振り返る。

自習室の窓に人影が見える。

菱見「(眩く) 川村……」

× × ×

自習室の窓に立つ紗雪。

まっすぐにマウンドの菱見を見据え、無言で

菱見のペンダントを突き出す。

揺れるペンダントヘッドの向こう、マウンド

の菱見が小さく頷く。

× × ×

菱見、ミットを構える太田に向き直り、ボー

ルをかざして言い放つ。

菱見「次、ストレート、オーバー150!」

○ 同・野球部部室・前

誰もいないマウンド。

音楽室からピアノと歌声が聞こえる。

恐る恐るドアの隙間から中を覗く紗雪。

紗雪「!(小さく悲鳴を上げる)」

菱見が床に転がっている。

○ 同・野球部部室・室内

紗雪、菱見に駆け寄り抱き起こす。

紗雪「菱見君! 大丈夫? しっかりして!」

荒い息、血の気の失せた顔に弱々しい笑顔を

浮かべる菱見。

菱見「世界の真ん中にある虫は?」

紗雪「え? 何? 今すぐ救急車呼ぶから」

立ち上がる紗雪の足首を掴む菱見。

菱見「落ち着けよ、そんなの呼んでどうすんだよ?」

紗雪「ゴメン!(時分の頭を叩く) 一人で校門の外

まで歩いてこれる?」

菱見「ああ……」

紗雪の肩を借りて立ち上がる菱見。

紗雪「自転車取って来るから!(駆け出す)」

菱見「紗雪!」

紗雪「え?(振り返る)」

菱見「終わらせなかったぜ」

紗雪「うん!(強く頷く)」

もう一度強く頷き、部室を飛び出して行く紗雪。

○ 病院・室内(夕)

4人部屋。

ベッドに菱見、その脇に医者と看護師が立ち、

紗雪は林檎をむきながら隣りのベッドの老人

と話している。

菱見「先生、今日156キロが出ましたよ」

医者「バカ言っちゃいけないよ! その肩じゃあキ

ヤッチボールだって無理だ」

満足そうに目を閉じる菱見。

ゆっくりと暗転。

○ 星川高校・校長室・室内

ソファーに菱見を挟んで校長と太田が座りT

V画面を見つめている。

それを取り囲む報道陣。

画面「国立アックス、4順目の選択希望選手は、菱見元基、投手、星川高校」

フラッシュの中、笑顔で校長と握手する菱見。

○ ラーメン屋・外観

雑居ビルの1階、表には数人の客が並んでいる。

○ 同・店内

厨房の中、慌しく働く進藤。

進藤「！」

進藤のジーンズの尻ポケットの中で携帯電話が振動している。

進藤「(咄く) やったなモトキ！」

一瞬笑顔を浮かべまた慌しく働く進藤。

○ 星川高校・自習室・室内

他に誰もいない部屋。

携帯電話を閉じる紗雪。

紗雪「おめでどう菱見君、おめでどう進藤君、おめでどう……アタシ！」

天井を見上げ静かに目を閉じる。

○ 同・グラウンド

報道陣に囲まれ、ナインに胴上げされる菱見。

○ 江田学園・中庭(夜)

粉雪が舞う中、クリスマスの電飾が輝いている。

○ 同・園長室・室内(夜)

本棚は片付けられ、部屋の隅にダンボール箱が高く積まれている。

パソコンに向かう江田、ノックの音に、

江田「どうぞ」

ドアが開く、紗雪が立っている。

江田「紗雪！(笑顔で立ち上がる)」

ソファで向き合う江田と紗雪。

江田「元基は今、東京なんだよ、年末に一度戻って

来て、年明けにはアックスの寮に入る予定だぞうだ」

紗雪「先生これ(テーブルに貯金通帳を置く)」

江田「？」

紗雪「菱見君から預かって来ました」

江田「(通帳を開く) こ、これは……」

紗雪「子供達のためって」

江田「！」

驚きの表情で紗雪を見る江田。

○ 同・中庭(夜)

電飾の向こうに園長室の窓が見える。

窓の中、身振り手振りで懸命に何かを説明している紗雪。泣き崩れる江田。

首を振り続ける江田の手に、無理やり通帳を握らせる紗雪。

○ ラーメン屋・店内(朝)

開店前の人気のないカウンターでスポーツ紙を広げる進藤。

「アックス・ルーキー菱見、キャンプ初日で早くも故障！」「回復見込みナシ！ 野球生命の危機！」の見出し。

進藤「お疲れさん……」

新聞を閉じて軽く一礼し、黙々と仕込みの準備を始める進藤。

○ 江田学園(新生)・正門前

真夏の空と太陽。

アーチ型の飾りのついた門。

アーチには「江田学園」の真新しいレリーフ。から俺達は自分の手で取り分けることにした

……」

○ 同・中庭

蟬の声に負けじと唸りを上げる洗濯機。

その横で水を張ったバケツに足を突っ込んだ

紗雪が文庫本を読んでいる。

紗雪「!(人の気配に顔を上げる)」

木漏れ日の庭先、三角巾で左腕をつり、キャリーバッグを引いた菱見が立っている。

紗雪「菱見君！」

本を投げ捨て裸足のまま駆け寄る紗雪。

菱見「(まわりを見渡す) ここが新しいエデンか……」

向日葵の咲く庭の向こうに広がる田園風景。

紗雪「前よりずっと田舎で、建物もオンボロになっ

たけど悪くないでしょ？」

菱見「(笑顔) うん、いい所だ」

紗雪「おかえりなさい！」

菱見「ただいま！」

紗雪「園長先生、会議で今日は夜まで帰って来ないんだ……」

菱見のバッグを引いて歩き出す紗雪。

紗雪「そうだ！ 進藤君の働いてる店行こうか？」

ここから車で1時間くらいだから

菱見「ケンタ、まじめに働いてんのか？」

紗雪「5年たったら自分の店を持つんだって張り切ってるよ」

菱見「マジで？（嬉しそうに笑う）」

木漏れ日の庭、玄関に向かい並んで歩いて行く菱見と紗雪の後ろ姿。

菱見（ナレーション）「俺達は何を手に入れて何を失ったのか？ 俺達のしたことは正しかったのか？ それとも……」

○ 市街地

バイパス道路を走る軽のワンボックス。

○ ワンボックス・車内

ハンドルを握る紗雪を笑顔で見る菱見。

菱見「スゲーな、いつの間に運転なんか」

紗雪「学園を手伝うのに、運転できた方が何かと便利だからって園長先生が」

赤信号。

紗雪「あっコレ、ありがとう！」

ペンダントを外す紗雪。

紗雪「ゴメンね、ずっと預かりっぱなしで」

菱見「ああ」

紗雪「（笑顔）いっぱい勇気もらったよ！」

菱見「そうか、よかった」

紗雪「ねえ、この中何が入ってるの？」

ロケットをそっと指でなでる紗雪。

菱見「開けて見なかったのか？」

紗雪「だって、菱見君がいいって言ってないのに開けらんないよ」

菱見「（笑う）いいよ」

紗雪「ホント？」

嬉しそうにロケットを開ける紗雪。

紗雪「？」

中には小さく折りたたまれた赤い縞模様の紙。

菱見「初めてエデンに連れて来られた夜、川村が俺にくれたんだ」

紗雪「！」

×

フラッシュ。

×

ポケットから赤い縞模様の包みのキャンディ

×

菱見「俺の宝物さ（照れくさそうに笑う）」

いきなり子供の様に声を上げて泣き出す紗雪。

慌てる菱見。

信号が青に変わり、後ろの車がクラクション

を鳴らす、ペンダントを握りしめたまま泣き続ける紗雪。

×

○ ラーメン屋・外観

バイパス沿いのモダンな造りの店。

駐車スペースにはぎっしりと車が並び、看板

には「らーめんエデン」の文字。

○ 同・店内

広々とした店内は活気に溢れている。

カウンターの中央、『エデン』と書かれたお揃いのTシャツを着た従業員達にテキパキと指示を出す進藤(27)の後ろ姿。

進藤「（振り向く）らっしゃーい！」

入り口に、菱見(27)と紗雪(27)が笑顔で立っている。

菱見はスーツにネクタイ、紗雪はマタニティ

ドレス。

進藤「おう！ 奥でみんなもう集まってるぜ」

×

奥の座敷。

菱見と紗雪が入ってくる。

星川高校のナインが揃っている。

太田「おっ！ 来たな！ 詐欺夫婦」

菱見と紗雪を指差す太田(46)。

菱見「（苦笑）そろそろカンベンして下さいよ、監督もう10年言い続けてるでしよう？」

太田「いや、俺はまだまだ言い足らんぞ！ だいたいお前らはだな〜」

まあまあとんだめる森(27)。

頭をかきながら座に着く菱見と紗雪。

ビールの並んだお盆を持った進藤が入ってくる。

菱見（ナレーション）「ただ一つ確かなのは、17歳

のあの時、俺達は巨大な何かと必死に戦ったと言うことだ。あの時の痛み、それは今でも俺達

の小さな誇りだ」
笑顔のナイン、笑顔の太田、そして笑顔の紗
雪、進藤、菱見。

了